

【調査報告】

阿波人形浄瑠璃の伝承への取り組み

長瀬 淑子

一 はじめに

阿波人形浄瑠璃は三〇〇年以上の歴史を持つ伝統芸能で、特に農村地域では最大の娯楽として古くから人々の間で親しまれてきたが、昭和に入ると、庶民の娯楽の多様化とともに次第に人気を失い、衰退していくことになった。

しかし戦後になると、阿波人形浄瑠璃を再興しようという動きが次第に活発になり、行政のサポート体制の充実、伝統的な座の復興、新しい座の結成といった流れの中、現在では人形浄瑠璃の愛好者も増え、各座が人形浄瑠璃を上演する機会も非常に多くなってきている。

それでは、実際にはどのような形で阿波人形浄瑠璃の伝承への努力がなされてきたのだろうか。本稿では、まず阿波人形浄瑠璃の歴史的展開を整理した上で、行政や各種団体の、その復興へのさまざまな取り組みを紹介する。その上で、人形浄瑠璃の実際の担い手である人形座の伝承への取り組みを、勝浦座・平成座の事例をもとに紹介したい。

阿波人形浄瑠璃に関する既往の研究は、その歴史的側面に関するものがほとんどで、人形浄瑠璃の「現在」に焦点を当てた論考はほとんど見られない。そうした意味で、ここで人形座の現状を紹介することは、今後の阿波人形浄瑠璃研究にとっても意味があることと考える⁽¹⁾。

二 阿波の人形浄瑠璃

(一) 阿波人形浄瑠璃の歴史

徳島にいつどのようなようにして人形浄瑠璃がもたらされたのかについては、はっきりしたことはわかっていない。しかし、西の宮の戎かき百太夫がその晩年淡路に移り住み教えた人形遣いの技が、後に徳島に伝わったという伝説があるように、人形浄瑠璃の盛んであった淡路を経由して徳島に伝来したことは間違いないと考えられている。一六世紀末になると、淡路では

すでにいくつかの人形座が活躍しており、源之丞座が特に有名であった「四国大学阿波の文化研究会 一九九五 一三」。

元和元年（一六一五）、阿波藩主蜂須賀家政は大坂夏の陣の戦功により淡路島を増され、以後、淡路島は阿波藩の所領となった。それ以降、阿波と淡路の交流が盛んになり、阿波でも人形浄瑠璃に対する関心が高まっていった。蜂須賀公は、祝事の際に人形浄瑠璃の座を城内に招いたり、座員の労役を免除したりして、人形浄瑠璃の保護に努めた。また人形浄瑠璃上演時には、三里四方では歌舞伎など他の一切の興行を禁止し、これによって人形浄瑠璃の座は独占興行を行うことができたという「四国大学阿波の文化研究会 一九九五 一三」。

一八世紀には淡路の人形座の数が増え、京都や大坂にまで興行に出かけて行くようになった。源之丞座、久太夫座、六之丞座が特に有名で、毎年交代で京都の御所に召されて正月に三番叟を演じるほどになっていた「四国大学阿波の文化研究会 一九九五 一三」。淡路の人形座が頻繁に徳島へ来て公演していたため、徳島ではプロの座が育たなかったといわれている。そのかわり、特に辺鄙な場所にある村では、本職の人形座が訪れることも少なかったため、各地域で農民たちが村がかりで座を作り、浄瑠璃や人形練りを自ら練習して、祭礼のときなどに人形浄瑠璃を上演した。徳川幕府は公には村芝居を禁止していたが、その御法度にもかかわらず、農民たちは唯一の娯楽である芝居を上演し続けた「四国大学阿波の文化研究会 一九九五 三八」。

城下町やその周辺の平野部では、一般に寺社の境内や農閑期の田などに「掛け小屋」と呼ばれる臨時の芝居小屋を建て、そこで人形芝居を上演していたが、旅の一座が容易に訪れることのできない山間部などでは、農民たちは自ら座とともに「農村舞台」と呼ばれる常設の舞台を寺社の境内に

建設し、そこで人形芝居を楽しんだという。

当時徳島では吉野川流域を中心に藍の栽培が行われ、その販売が全国に広がるにつれ人々の暮らしは潤沢になり、娯楽を求める余裕も生じた。そのため、人形浄瑠璃は著しく発展を遂げていった。さらに、藍の栽培によって富を得た豪農たちが人形浄瑠璃を支援し、最も人気のある娯楽として藩中に広がっていった。藍商人は、藍取引のために江戸や上方に赴くたびに新作の芸題や浄瑠璃を地元を持ち帰った。そして経済力にものをいわせて人形遣いのパトロンとなり、自らも浄瑠璃を語るようになっていった。暇とお金がなければ三味線や語りを習うことはできなかったため、浄瑠璃の太夫をすることは当時の男性にとつてのステータスシンボルであった。

江戸末期から明治にかけて、京都・大坂などの大都市では、人形浄瑠璃の人気は急速に低下していったが、人形忠・天狗久など数多くの優れた人形師を輩出した徳島では、屋外で人形浄瑠璃を上演するため通常よりも大きめの人形を使っており、その大型でたくましい人形が人気を集め、人形浄瑠璃はますます盛んになっていった。明治中期には、淡路の人形座は四八座、徳島の人形座は七〇座にのぼったという「四国大学阿波の文化研究会 一九九五 一三」。

しかし、大正・昭和にかけて活動写真や近代演劇など庶民の娯楽の多様化が進むとともに、次第に人形浄瑠璃の人気は衰退していき、淡路や徳島の人形座も次々と解散に追い込まれていった。それでも戦前は、三〇人くらいで一座を組んで、新潟から九州のほうまで巡業していた座がいくつかあったという。期間は三カ月から半年くらいの間で、巡業先で行き詰まってしまうときには、人形など全ての荷を売り人だけ帰ってきていた。このようなことは昭和一〇年頃まで続いていたらしく、現在も新潟に売ってきた人形が残っている。文化財として展示されていたり、その人形を使っ

て地元で浄瑠璃をしていたという記録も残っているという³⁾。

結局、第二次世界大戦後には徳島の人形座は勝浦座・寄井座・岡花座の三座のみになってしまったが、こうした危機的状况を受けて徳島の伝統文化である人形浄瑠璃復興の機運が高まり、昭和二十一年には阿波人形浄瑠璃振興会が結成され、昭和三十三年には、阿波人形浄瑠璃が徳島県無形民俗文化財に指定される運びとなった。

(二) 現在の状況

現在、阿波人形浄瑠璃振興会には四つの太夫部屋が登録されている。昭和三二年頃、県下には約五千人の浄瑠璃関係者がおり、三〇〜五〇人の三味線の師匠がいたが、現在では浄瑠璃関係者は一五〇人にまで減少しており、三味線の師匠は六人しかいないうえ、いずれも七〇〜八〇歳以上という高齢である(表1)。

現在、振興会に所属している人形座は一〇座ある。このうち勝浦座・寄井座・岡花座は戦前から続いている古い座である。木沢人形座は約二〇年前に結成された。昔は村に舞台があり座もあったのだが、人形などの道具類を全て売り払ってしまったため一時途絶えていたという。岡花座と木沢人形座は振興会に登録している座員数が少ないが、これは振興会に登録すると会費を払わなければならないので代表者のみが登録している由で、実際にはこの他にも座員がいる。

また、城北座は城北高等学校民芸部の出身者を中心として昭和五六年に結成され、鳴門座は昭和五六年、阿波人形浄瑠璃振興会鳴門支部の愛好者

表1 阿波人形浄瑠璃振興会加盟団体(太夫部屋)

太夫部屋	代表者	人数
浄親会	山村良明	10
楽栄会	東内 勉	5
喜笑会	北島 春一	13
友和嘉会	本郷 実	7

表2 阿波人形浄瑠璃振興会加盟団体(人形座)

人形座	代表者	座員数	男女比	結成年
勝浦座	池内 勲	17	11:06	戦前より
寄井座	山田晴吉	19	10:09	戦前より
岡花座	西村幸和	2	男性のみ	戦前より
木沢人形座	西本 功	3	2:01	約20年前
城北座	森田悦子	11	2:09	昭和56年
鳴門座	小林春成	7	2:05	昭和56年
平成座	松本 弘	20	3:17	平成元年
名月座	後藤伊都子	13	女性のみ	平成2年
あわ工芸座	後藤文子	13	2:11	平成5年
ふれあい座	岸野郁子	20	女性のみ	平成5年

を中心として結成された。平成座は平成元年、名月座は平成二年、あわ工芸座とふれあい座は平成五年に結成されており、この四座は比較的新しい座といえる(表2)。

現在ある一〇座のうち、人形がない、太夫がないなどの理由で、「傾城阿波鳴門」の八段目しか上演できない座が四座ある。新しい芸題を増やすには、人形、大道具に加え、三味線や太夫も必要となるので、お金もかり難しいという。

阿波浄瑠璃振興会には登録されていないが、比較的活発に活動を行っている座として、徳島県観光協会が運営している十郎兵衛屋敷民芸部がある。民芸部は昭和五四年に結成され、毎週土・日曜日に十郎兵衛屋敷(徳島市川内町)で「傾城阿波鳴門」の八段目の定期上演を行っている。

この他にも昭和三二年に城北高等学校、昭和三七年には勝浦園芸高等学校に民芸部ができ、最近では川内中学校に民芸部、川内北小学校に浄瑠璃クラブができた。

三 復興への取り組み

戦後から現在に至るまで、阿波人形浄瑠璃の復興に向けての様々な取り組みが、多くの機関・団体によりなされてきた。ここでは、こうした取り組みの実態について概述する。

徳島県教育委員会は、阿波人形浄瑠璃の保護育成を図るため、昭和四九年八月に木沢村坂州八幡神社の農村舞台、昭和五五年一二月には徳島市八多町犬飼の農村舞台を、県有形民俗文化財に指定した「徳島県教育委員会一九八二・二三」。また、昭和四九年には「かしらと藍玉」という映画を制作している。一方、県内人形座のうち岡花座に三カ年計画で育成費を交付して、道具類の整備や後継者育成の事業を行って座の充実を図り、昭和五三年以降は城北高等学校と勝浦園芸高等学校の民芸部に人形遣いと三味線の指導者を派遣し、後継者の育成を図っている「徳島県教育委員会一九八二・二三」。昭和五六年には、国の助成を受けて資料「阿波人形芝居の歴史と現状」を作成し、さらには人形浄瑠璃の伝承教室を開催しその発表会も行った。伝承教室は以後毎年開催されており、後継者の育成に大きく貢献している。

徳島県観光協会はアステイ徳島（徳島市山城町にある観光施設）、エディ資料館（鳴門市にある観光施設）、十郎兵衛屋敷などを運営しており、このうちアステイ徳島内にある「とくしま体験館」と十郎兵衛屋敷では、人形浄瑠璃の定期上演を行っている。とくしま体験館では平日はロボットにより、週末は人形座によって「傾城阿波鳴門」の八段目の上演が行われている。出演している人形座は現在、勝浦座・寄井座・鳴門座・ふれあい座・平成座・名月座・あわ工芸座・城北座の八座で、輪番で上演を受け持っている。

十郎兵衛屋敷は、昭和二九年に徳島県観光協会が買い取り、管理をするようになった。昭和五四年には犬飼の農村舞台（徳島市八多町）をモデル

とした舞台を建設し、それと同時に地元の人に呼びかけ、十郎兵衛屋敷民芸部を結成した。十郎兵衛屋敷は、県内ではじめて人形浄瑠璃を定期的上演する場となった。現在、民芸部の部員は地元の主婦一五名である。全員が人形遣いであり、三味線と太夫がいないため、上演の際には録音テープを使用している。

上演は定期上演と予約上演があり、定期上演は土・日・祝日の一〇時三〇分からと一五時からである。毎年夏になると、多くの観光客が人形浄瑠璃を見るために十郎兵衛屋敷を訪れるため、毎日一五時から定期上演を行っている。特に平成一〇年は、明石海峡大橋が開通したことにより例年より多くの観光客が十郎兵衛屋敷を訪れたため、平日でも一日に三回の上演を行っていた（年間の上演回数は三〇〇回前後）。

十郎兵衛屋敷では毎年六月に「十郎兵衛まつり」を行っている。平成一〇年は六月六・七日に開かれた（第三三回）。まつりには十郎兵衛屋敷民芸部だけでなく、あわ工芸座や平成座、さらには地元の川内中学校民芸部や川内北小学校の人形浄瑠璃クラブ、川内南小学校の生徒なども参加する。

阿波人形浄瑠璃振興会では、昭和二五年以降、毎年夏に「夏期阿波人形浄瑠璃大会」を開催している（平成一〇年八月一・二日には第五三回大会が開かれた）。また、文楽の関係者を招いて講習会を開くなど、技術の向上にも取り組んでいる。老人ホームなどへのボランティアや全国各地で行われるイベントなどの公演依頼を受け、県内の各人形座に斡旋するなどの仕事もしている。

県郷土文化会館（徳島市藍場浜）では、平成一〇年から県の予算で年に一回人形浄瑠璃フェスティバルを開催するようになった。

このように、県内の人形浄瑠璃関係者や様々な組織によって、徳島の人形浄瑠璃をより多くの人に知ってもらうために、また興味を持ってもらい

後継者を育成するために様々な努力がなされてきた。その結果、座が人形浄瑠璃を上演する機会は確実に増え、人々の関心も高まり、阿波人形浄瑠璃は以前よりも活性化した。

しかし、とくしま体験館や十郎兵衛屋敷での上演が「傾城阿波鳴門」に限られているためピーターが生まれにくいことや、人形浄瑠璃に興味を持つ若者が少ないことによる後継者不足、また、三味線の師匠が六人しかいない上いずれも高齢であるため、三味線や太夫の後継者についても懸念があるなど、まだまだ多くの問題を抱えている。

それでは実際の人形座は、どのような人々から構成され、どのような活動を行っているのだろうか。また、座のメンバーはどのような意識をもって人形浄瑠璃に取り組んでいるのだろうか。伝承への取り組みはどのような形でなされているのだろうか。ここでは戦前からの歴史を持つ伝統的な座の例として勝浦座、近年結成された新しい座の例として平成座を取り上げ、それぞれの座について以上のような点を見ていきたい。

四 伝統的な座の取り組み―勝浦座の事例

(一) 座の成り立ち

江戸期から人形芝居の盛んであった勝浦地方では、幕末頃、棚野の棚野座、坂本の坂本座、久国の久国座の三座があった。このうちの久国座が現在の勝浦座の前身であり、当時は国村久太夫座と称していたらしい。座の運営は「若連」と呼ばれる村の若衆を中心としたもので、明治期に入ると青年団に引き継がれた。青年たちの熱意で活発に運営されていたが、昭和

七年一月二六日、久国舞台が全焼し保管されていた人形、諸道具一切が焼失してしまった「徳島県教育委員会 一九八二―二二三」。ただし三番叟だけは細々と続けられた。

やがて終戦を迎えると、敏謙秋太郎・中西保太郎・倉橋春一らが中心となって個人所有の人形を使い、昭和二二年に勝浦座が誕生したのである¹¹⁾。同年、当時の那賀郡加茂谷の吉井座から人形一式を購入し、本格的な人形座の体裁を整えた。しかし、当時の芸題は演者の関係もあり、「傾城阿波鳴門」と「壺坂観音霊験記」の二つに限られていたという「徳島県教育委員会 一九八二―二二三」。

その後、昭和三七年には座の後押しで地元の勝浦園芸高等学校に民芸部が誕生し、現在も勝浦座が指導にあたっている。

(二) 座の構成・活動状況

現在、勝浦座の座員は一七名で、年齢は三〇歳から七三歳までと、幅広い年齢層の人々が所属している(平均年齢は五三歳)。男女比を見ると男性一名、女性六名となっている。座に入るのは三〇歳くらいになってからが多く、中心となって座の運営を行っているのは六〇歳代の人であるという。勝浦座はプロの座ではないため、座員のほとんどは別に仕事を持っている(主に農業)。座員数は常に一八〜二〇名程度を確保しているが、どうしても人が足りないときは勝浦園芸高等学校の民芸部の部員に助っ人を頼んでいる。

座員は太夫が一名と人形遣いが一六名である。昔は太夫や三味線をする人も多くいたが、今はほとんどの方が亡くなってしまい、三味線の師匠も少なくなつたため、習うのが難しいという。現在、公演のときには太夫部

屋から太夫と、三味線の人に来てもらっている。

座の運営にあたっては、勝浦町からの助成金二〇万円、団体会費二〇万円の計四〇万円と、そのほか公演の謝礼なども運営費に充てている。勝浦座が所有している人形の頭は二〇点、個人所有の頭一五点を合わせると計三五点の頭を所有しているが、長い間使っていると人形や大道具なども傷んでくる。人形の頭や着物、大道具の修理や、新たに人形の頭を作ることになると、頭一つで三〇〇五〇万円かかり、道具類の維持には頭を悩ませる。

練習は勝浦町の福祉センターで週二回（公演前は一日おき）、一九〇二二時頃まで練習している。現在上演可能な芸題は全部で二一題あり（阿波鳴門・壺坂・菅四・宿屋・すしや・太十・御所・御殿・玉三・熊谷陣屋・安達（袖萩祭文）・合邦ヶ辻・三十三間堂・新ノ口村・朝顔道行・伊賀越道中双六（沼津）・忠六・野崎・日吉丸・忠臣蔵・木下）、上演可能な芸題の数は毎年増えている。県内でこれだけ多くの芸題を上演できる座は他にない。もし、長い間上演していない芸題や上演したことのない芸題を依頼されても、ビデオを見て勉強してでも上演するという。そこには県内筆頭の座としての勝浦座のプライドが感じられる。

三〇年ほど前まで、人形浄瑠璃を上演するのは秋祭りや高齢者の会合の際など年二、三回であったが、近年は年三〇回以上上演の機会がある。毎年恒例の公演には漁祭り恵比寿舞（小松島市和田島）、犬飼農村舞台（徳島市八多町）、人形浄瑠璃大会（大阪府能勢町）、振興会大会、浄瑠璃フェスティバルなどがあり、この他にも月一回はアステイ徳島で上演している。

勝浦座は、後継者の育成にも熱心に取り組んでいる。昭和三七年に勝浦園芸高等学校に民芸部が誕生して以来、部の指導を行っている。現在は毎週火曜日一五時から座員が指導に行っており、公演前になると毎日のよう

に指導に行く。その甲斐もあり、現在民芸部の出身者が四名、座に所属している。

（三）座員の意識

浄瑠璃に対する座員の意識を知るため、平成一〇年二月一日に座員を対象としたアンケート調査を行った（回答数一一。うち男性六、女性五）。ここではアンケート調査の結果を引用しながら、座員の人形浄瑠璃に対する意識を探っていききたい。

まず座に入ったきっかけであるが、勝浦座は戦前に由来する古い座であり、家族など、身近に人形浄瑠璃に携わっていた人がいたことから座に入したというケースが少なくない。また、座員の意識として、「跡を継ぎ座を支えていかなければならない」と考えている人が（特に年輩の座員の中には）少なくない。

若い世代の座員の中には「友人に誘われて加入した」という答えもあり、「高校時代に民芸部で人形浄瑠璃を演じ、そのあと座に誘われて」という回答も数件見られた。現在では昔のように「（親がやっていたから）跡を継ぐ」という考え方は薄れつつあり、そのため現役の座員が周囲に声をかけて人を集めることが多くなっているようである。

「浄瑠璃に携わっていて、昔と変わったと感ずることはありますか」という問いに対しては、「変わった」という答えが多く返ってきた。具体的には、「生活の中に人形浄瑠璃がなくなった」「浄瑠璃の内容をわかっている人が少なくなってきた」「少しずつ観客数が増えているような気がする」「ファンが確かに増えつつあるが、全然違う文楽を見て目が肥えていて、素人が熱演してもあまり感動しない」などという答えがあった。様々な取り組み

みの結果、人形浄瑠璃のファンが増えてきていると感じている人は多い。しかしそのファンと人形浄瑠璃を上演する側では、お互いが求めるものはずれがあるという印象を持つ人もいるようである。

とくしま体験館での上演に象徴されるような人形浄瑠璃の観光化については、「人形は人に見てもらい楽しんでもらうものであり、阿波踊りとともに徳島の代表の一つになってほしい」「古いものだけにこだわらず、子供が見てもわかるような芸題をするなど、誰にでも関心を持ってもらえるものを取り入れたらいいと思う」などの意見があった。

「あなたにとって浄瑠璃とは何ですか」という問いに対しては「趣味、楽しみ」と答えた人が最も多く、「生き甲斐」であると答えた人も何人かいた。さらに具体的には、「同じ目的を持つ仲間や伝統芸能を守っていくという気持ちがある」「趣味であるが、後世に伝えなければいけないという使命感のようなものもある」「貴重な伝統芸能を保存している誇りと責任を感じての生き甲斐」というような答えがあった。

昔と違いた上の代から下の代へと自然と引き継がれていくものではなくなくなってしまうためか、「伝えていくこと」を意識している人が非常に多かったが、一方で、ほとんど全員が浄瑠璃を「趣味として遊びとして楽しむもの」としても捉えていることがわかった。

五 新設の座の取り組み―平成座の事例

(一) 座の成り立ち

徳島には現在人形浄瑠璃の三味線の師匠が四、五人しかいない上、いず

れも高齢である。三味線の師匠がいなくなると人形浄瑠璃の伴奏をする人がなくなり、阿波人形浄瑠璃も途絶えてしまう。昔から、年をとったら人形浄瑠璃をしてみたいと考えていた松本弘氏（平成座代表）は、そう思って新聞広告でメンバーを募集し、昭和六三年から二年間、三味線教室を開いた。教室は好評であったが、一年目と二年目ではメンバーが全く違い、三味線を続ける人はなかなかなかった。

そこで、松本氏は自分たちで座を結成することを決意し、平成元年一月に平成座を結成した。最初のメンバーは二七名で、口コミや新聞広告で募集したり、地元の婦人会にお願いしたほか、三味線教室に通っていた人が四、五名残った。始めたときは全員が初心者だった。最初は松本氏が人形を二体（お弓、お鶴）用意した。その後、費用ができ新しく作ったり、寄付してもらったりして、現在は八体の人形がある。

座は語り・三味線・人形の三業が一体となって形成するものであるが、この三業が整ったのは平成座が始めてであった。

(二) 座の構成・活動状況

座の結成当時、座員は一七名であったが、他の座に引き抜かれたりしたため現在の座員は二〇名で、このうち三味線が三名、太夫が六名、人形遣いが一名となっている。年齢は三九歳から七二歳までで、平均年齢は六四歳。男女の内訳は男性三名、女性一七名。職業はサラリーマン、主婦、自営業、農業と様々である。

人形の練習は毎週月曜と金曜に行っているが、主な練習日は月曜日である。淡路から指導者を招いているが、先生が来られないときはビデオを見て練習、勉強している。練習は川内土地改良区（徳島市川内町）の三階で

行っており、ここが事務所にもなっている。三味線と太夫の師匠は、淡路の人間国宝・鶴沢友路氏である。三味線と語り九人がそれぞれ月二回ずつ稽古に行く。現在上演可能な芸題は、「寿式三番叟」「傾城阿波鳴門」「艶姿女舞 三勝半七酒屋の段」「八百屋お七」「壺坂観音靈験記」の計五題である。

座の運営にあたっては座員から会費を集めており、会費は人形遣いが二千円、三味線と太夫が毎月千円で、さらに師匠への謝金（毎月一万円）が加わる。人形や三味線、太鼓の修理などにかかる費用は、公演の謝金で賄っている。

公演は年に三〇回程度行っている。毎年恒例の公演には、川内婦人会総会や地域の秋祭り、淡路人形サミット、国民文化祭、十郎兵衛まつり、振興会大会、浄瑠璃フェスティバルなどがあり、とくしま体験館でも毎月二回程度公演しているが、とくしま体験館では三味線は師匠しか出演することができないので、人形遣いだけが出演している。このほかにも個人の依頼で結婚式や家の落成式で上演したり、ボランティアで老人ホームなどへ公演に行くこともある。

また、県内の人形座には三味線や語りをする人がいないところが多い。そのため、他の人形座が公演するときに、三味線の師匠を呼ぶと謝金が高いので、三味線と太夫の人だけ平成座から来てほしいという依頼が最近増えている。

平成座は平成九年から「あわなる全国大会」を主催している。これは徳島が舞台の「傾城阿波鳴門」をもっと上演してもらおうという目的から始まった大会である。毎年全国の人形座に通知し、五月の一〜三日に郷土文化会館で開催される。全国から三〇座以上が集まり「傾城阿波鳴門」を上演する。主催はあわなる保存会で、保存会は平成座、川内中学校民芸部、

川内北小学校浄瑠璃クラブ、川内町婦人会、十郎兵衛屋敷民芸部で結成しているが、実質の運営は平成座が行っている。

このあわなる全国大会に、地元の川内北小学校と川内南小学校も参加している。平成座の座員である藤本宗子氏がPTA会長を務めていたこともあり、平成九年に川内北小学校に人形浄瑠璃クラブが誕生した。クラブでは小学生なので人形は使わず、「傾城阿波鳴門」を劇化し、三味線と太夫の語りに合わせて登場人物のお弓とお鶴を子供が演じている。また川内南小学校には人形浄瑠璃クラブはないが、大会では「十郎兵衛数え歌」を児童六〇名で発表した。

平成座は、地元の川内中学校民芸部、川内北小学校浄瑠璃クラブなどに助成金を渡し、多くの子供たちに人形浄瑠璃に触れ親しんでもらおうと取り組んでいる。

(三) 座員の意識

座員の人形浄瑠璃に対する意識を知るためのアンケートを、平成一〇年一二月一八日に実施した。回答数は八で、うち男性が二、女性が六であった。

座に入ったきっかけについては、平成座はまだ新しい座であり、座を結成するときに地元の婦人会にお願いしたり新聞広告などで座員を募集したため、「友人に誘われて」という答えがほとんどであった。そのほか「三味線が好きだから」「人形浄瑠璃に興味があったから」という答えもあった。平成座の座長である松本氏によると、人形浄瑠璃をやってみようと考える人は子供の頃人形浄瑠璃を見たことがあったり、身近なところに人形浄瑠璃に携わっていた人がいたり、何らかのかたちで人形浄瑠璃に触れたこ

とがある人がほとんどであるという。

とくしま体験館での上演や人形浄瑠璃の観光化については、「マンネリ化するので、(阿波鳴以外の)他の芸題も上演した方がいい」「上演回数と会場を多く持ち、もつとPRに力を入れること」「座員の技術の向上が必要」などの意見があつた。

「あなたにとつて浄瑠璃とはなんですか」という問いに対しては、勝浦座と同じく「趣味、楽しみ」と答えた人が最も多かつた。具体的には「気晴らしになり、浄瑠璃を始めてから何でもすつとできるようになった」「周囲の人との親睦が楽しみであり、伝統芸能を保存する自覚が芽生えた」「人の情に感じ、情操教育によい」「健康によい」などでの回答があつた。なかでも、人形浄瑠璃は「健康によい」と答えた人が最も多かつた。三味線を演奏したり、浄瑠璃を語ったり、人形を操ったりとそれぞれが難しい上に、その三つの息が合わなければ人形浄瑠璃は完成しない。人形浄瑠璃をしていると、細やかな所で気を配り体を動かすのであろう。平成座の座員の平均年齢が約六四歳と勝浦座と比べて高いためか、浄瑠璃を一種の健康法を兼ねた趣味というように捉えている人が多いように感じられた。

六 おわりに—伝える座と広める座

現在、徳島の人形浄瑠璃界は、若い世代で人形浄瑠璃に興味を持つ人が少ないため、高齢化が進んでいる。阿波人形浄瑠璃振興会の事務局長である後藤文字氏によれば、浄瑠璃をしている人のなかでは五〇歳代でも若い方に入るといふ。

後継者育成という点から見ると、勝浦座は、地元の勝浦園芸高等学校に

民芸部を誕生させ、直接の後継者育成のため、技術的な面での指導を熱心に行っている。そして、その結果、現在民芸部の出身者四名が座に所属している。だいたい二〇代後半になってから座に入っており、これは、その時期になると時間に余裕ができてくるためであるようだ。

一方、平成座は、川内北小学校に人形浄瑠璃クラブを誕生させたり、川内中学校民芸部にも助成金を渡すなどしてはいるが、人形の扱いなど技術的な指導は行っていない。平成座自体がまだ結成されたばかりの座であることも、その理由の一つである。平成座の座長である松本氏は、「子供の頃に人形浄瑠璃に触れていれば、大人になったときに抵抗なく受け入れることができ、もつと興味をもってくれる人が増えるのではないか」という考えから、子供たちが浄瑠璃に触れる機会を作り、あわなる全国大会を主催するなどして、もつと浄瑠璃に親しんでもらおうと努力している。

勝浦座と平成座の後継者育成のための取り組みを比較してみると、勝浦座は技術を上の世代から下の世代へと引き継いでいくことを重視しているが、平成座は技術の伝承・後継者の育成というよりは、人形浄瑠璃を一般に広めることを重視しているように思われる。勝浦座は、少数ではあるが若い世代に技術を伝え、確実に座の後継者を育成している。一方平成座は人形浄瑠璃を広めることで、確実ではないが将来的に人形浄瑠璃に興味を持つ若い世代が増えることを期待している。もちろんどちらの座も「伝える」「広める」という双方の性格を持ち合わせているが、勝浦座は人形浄瑠璃を「伝える」こと、平成座は「広める」ことに重点を置いていると言うことができるのではないか(一方、二つの座に共通しているのは、楽しいから人形浄瑠璃をやっている、という点である)。

二つの座のこのような性格の違いは、座員の意識の違い、ひいては座の歴史、伝統の長さの違いから来ていると考えられる。アンケートの結果に

見られたように、勝浦座では「座を引き継いでいかなければならない」という昔からの考え方が現在でも根強く残っていたが、平成座は新設の座であるため、「伝統芸能の継承」という意識はあっても、「座を引き継ぐ」という意識はほとんど見られなかった。

後継者不足という問題のほかにも、まだ解決されていない問題は残されている。例えば、徳島の人形浄瑠璃にリピーターが生まれにくいという問題である。人形浄瑠璃の定期上演を行っているアステイ徳島と十郎兵衛屋敷では、「傾城阿波鳴門」の八段目しか上演していない。これに対して、勝浦座、平成座はともに上演可能な芸題を年々増やしており、「他の芸題も上演すべき」という意見が多数あったものの、「傾城阿波鳴門」しか上演できない座がいくつかある現状から見ても、ほかの芸題を取り入れることはまだ難しいと考えられる。

師匠が少なく将来が心配されている三味線や太夫の後継者問題も残されており、この問題に対しては平成座が熱心に取り組んでいる。現在、平成座では、三味線と太夫の稽古のため毎月二回淡路に通っている。また川内北小学校の人形浄瑠璃クラブでは、現在、子供たちが太夫に挑戦しはじめている。

このように、徳島の人形浄瑠璃界は様々な問題を抱えているが、勝浦座も平成座も徳島の伝統芸能である人形浄瑠璃を盛り立てていくために、様々な工夫をし活動している。新世紀は子供が減ってお年寄りが増える「少子・高齢化」が一段と進む。地域で伝えられている伝統芸能を引き継いでいくためには、世代を越えた交流がこれまで以上に大切になってくる。その際、勝浦座や平成座に見られるような「伝える」「広める」という二つの視点は、民俗文化の伝承にあたって必要不可欠な視点となっていくように思われる。

注

(1) 本研究のもととなった調査は、平成一〇年四月～一二月にかけて行った。

(2) 阿波人形浄瑠璃振興会事務局長・藤本文子氏の「」指示による。

(3) 阿波人形浄瑠璃振興会事務局長・藤本文子氏の「」指示による。

参考文献

四国大学阿波の文化研究会 一九九五 『阿波の人形浄瑠璃』 四国大学

文学部篠原研究室

徳島県教育委員会編 一九八二 『阿波人形芝居の歴史と現状』 徳島県

教育委員会

西田素康 一九九二 『人形浄瑠璃の歴史 阿波の木偶』 県郷土文化会

館

久米惣七 一九六三 『阿波の人形師』 中央公民館

(三七七六―〇〇一三) 徳島県麻植郡鴨島町上下島一八五―六